



TITLE:

妙心寺の寺領と領民の負擔

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. 妙心寺の寺領と領民の負擔. 經濟論叢 1926, 23(5): 807-825

ISSUE DATE:

1926-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128469>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 五 第 卷三十二第

行發日一月一十年五十正大

論 叢

消費税の理想としての專賣

教授 法學博士

神戸 正雄

價格の一理論

九州帝國大學
教授 文學博士

高田 保馬

伊豫の百姓一揆

教授 經濟學士

黒正 巖

時 論

再び我國の人口問題に就て

教授 法學博士

山本美越乃

說 苑

アダム・スミスの勞賃論

講師 經濟學士

森 耕二郎

妙心寺の寺領と領民の負擔

經濟學士

中川與之助

雜 錄

近世の恐慌と其一般的普及性

高松高等商業學校
教授 經濟學士

小川 福太郎

信州小布施の地割制度

教授 經濟學博士

本庄榮治郎

Vital Statistics に就きて

教授 法學博士

財部 靜治

英吉利海運の統計的研究

教授 經濟學博士

小島昌太郎

勞農露國の豫算

經濟學士

吉川 秀造

法 令

シムペーターのシモツラー觀

經濟學士

菊田 太郎

郵便年金令・郵便年金特別會計規則・郵便年金規則・簡易保險規則改正

妙心寺の寺領と領民の負擔

中川與之助

一 序 言

佛教と神道とは本地垂迹の理論によりて巧みに融合せられ、所謂神佛一體の思想となりて久しく日本國民の信仰を支配したものであるが、それと同時に僧侶神官は社會階級上、特殊の地位を占めて種々の特權を有してゐた。佛教は徳川時代に至りては、鎌倉室町時代の如き勢力を失ひたりと雖も、社會に於ける傳統的勢力未だ全く衰へず、且つ家康が佛教の勢力を政治上に利用せんとするの策を樹つるや、かの神社に神社領を興へたる如く、寺院に寺領を興へたること頗る多かりしが爲め、所謂寺社頭は御領天領藩領等に相亞いで日本國土の大なる部分を占むるに至つた。近時、天領及び藩領に就ての有益なる研究は次第に發表されつゝあるが、寺社領の研究は甚だ尠く、殊に財政經濟的方面より觀察したるものは殆ど其例をみざる如くである。併し日本に於ける寺社領の研究は管に神社寺院の經濟史的發達を知る爲めのみならず、日本全體の財政經濟の發達を知る上にも、逸すべからざる一分野をなすものであると思ふ。吾人はかくの如き見地より寺領の一例として妙心寺領並びにその領民の生活を述べんとする。何故に妙心寺領を選びたるかに就

ては特段の理由あるに非ず、從來の研究に關聯して之を試みたるに過ぎぬ。而してその年代も専ら徳川時代に限ることゝした。

二 妙心寺領の範圍と年貢の收納組織

徳川時代に於ける妙心寺領は、左に掲ぐる元和元年七月廿七日に家康の下した御朱印狀並びにその目錄に據つて明かであり、徳川の末期に至る迄變更された所がない。

權限様御朱印之寫

當寺領四百九拾壹石餘

目別錄
在別紙

全可有寺納并門前境內山林竹木如先規令免除訖者守此旨佛事勸行修造等無怠慢 獨可抽天下安奎之精祈之狀如件
元和元年七月廿七日 御朱印

妙心寺高目錄之事

妙心寺

一、拾貳石七斗六升四合

西院

一、百九拾貳石七斗四升六合

西京

一、八拾貳石四斗六升六合

龍安寺前

一、參拾五石

西岡物集女

一、百石

池上金臺寺

一、四拾三石

原村

一、貳拾五石貳斗六升

富田

(以下省略)

右の中、西院村、西京村、龍安寺前、池上村は山城國葛野郡にあり、物集女村は同じく乙訓郡にある。原村と富田庄とは攝津國島上郡にある。即ち村は合せて七個所にて總石高四百九拾壹石貳斗參升六合であつた。右は朱印狀により、妙心寺が地頭として公に知行する石高なるが、寛永十一年五月十六日改 妙心寺領御朱印之内當領目録并百姓指出之寫に據れば、この外に、龍安寺より西京川邊普請料として寄附せられしもの拾石、石川備後守の檢地の際に寄附せられし竿先の出目が貳拾七石三斗四升三合、雜華院分貳石九斗三升七勺が加はりて總計五百參拾壹石五斗壹升八勺となつてゐる。

妙心寺領といへば悉く大本山妙心寺の寺領なる如くに考ふれども、事實は然らずして、本山たる妙心寺の寺領即ち所謂「常住領」と、塔頭諸院の寺領とを併せいふものである。元來、徳川初期に於ける大本山妙心寺の寺領は極めて僅少なりしが、一山の諸寺領を總括して之を妙心寺領の名の下に、御朱印地に認めしものであるといふ。塔頭諸院は時代によりて興亡あり、且諸院間に所領の譲り替も屢々行はれたるが故に、各寺領は必ずしも一定したるものではないが、試みに寛永十一年五月十六日の調査に基き、當時の寺領配分狀態を示せば次の如くである。

本	所	石	高	本	所	石	高
常	住	八八	一七九	東	海	一	七八三〇

說苑 妙心寺の寺領と領民の負擔

第二十三卷 (第五號一〇七) 八〇九

1) 妙心寺領高目録并百姓指出之寫(寛永十一年)

退藏院	七五、七八三六	養源院	四一、九七〇〇
大心院	三〇、〇二〇五	德隣院	四、二四四〇
福昌院	七、六八三九	即心院	〇、七六一八
賜谷院	四、一九九二	養徳院	九、一一一二
天授院	一五、〇九三〇	徳雲院	一八、二四七三
衡梅院	三二、六六三六	俊岩院	一五、二〇三八
宗真院	五、一七八七	靈雲院	二九、三二八〇
禪可院	〇、七八六〇	聖澤院	〇、七四九〇
如是院	一五、三三九五	西松院	一、〇八四〇
三友院	一六、一八二五	龍泉庵	〇、八五八〇
保福院	一七、六七六〇	一任軒	二五、二〇六〇
福壽院	一六、八〇三七	物集女	三五、〇〇〇〇

總計 五〇九、一四一〇
石斗升合勺

(備考) (一) 右表の總石高は御朱印高より拾七石九斗五合多い。之は常住領に於て、龍安寺の寄進拾石、檢地筆先の川口七石九斗五合加はれるに由る。(二) 右表の最後に物業女とあるは利名にて本所名でないが、姑く資料の儘に之を掲載した。(三) 塔次諸院には後に院名を改めたものがある。即ち賜谷院は長興院、三友院は東林院、福壽院は乾徳院、俊岩院は春光院、一任軒は高岩院と改む。

徳川時代に御朱印狀を有せし寺社が、寺社領に對して如何なる權利を有せしかといふに、夫は單に公領關係即ち公の知行關係を示すに止りて、私有權を認めたるものではないが、一般に年貢

の收納權を有してゐたことは明である。しからば先づ妙心寺領の年貢收納權は如何なる機關及び組織によつて行使されたか。既に述べたる如く、妙心寺領は「常住領」をはじめ諸院の寺領に分れ、各領民は己の年貢を上納すべき寺院を、「本所」又は「地領」と呼ぶ。これら各「本所」は獨自の方法組織によつて各所領の年貢を收納するに非ず、一切の妙心寺領について、その年貢收納の方法は大本山に於て之を統一したものである。次にこの機關を一言せう。

(イ) 本山の年貢收納機關 大本山妙心寺に於て、専ら寺領の事務を掌るものを、「田地方」又は「田地方役人」と稱す。「田地方之記」に據れば、享保年代より明治五年頃まで、常に定員は六名にて一山の諸院より一年交代に之に當つてゐる。この「田地方」の補助機關として別に「地方役掛り行者」若くは「田地方掛り行者」とよばるゝ行者(半俗半僧の使用人)を置く。此定員は判然せざれども一二名なりし如く、その任期は享和二年後よりは五個年、文政十三年よりは二個年となつてゐる。「田地方」は一年交代を原則とするが故に、事務承繼の必要上、補助機關たる「行者」の任期を比較的長期にしたものであらう。

(ロ) 領民側の年貢上納機關 徳川時代の村は一の自治團體にて、村落内の行政は庄屋・年寄(組頭・百姓(總)代等の村役人によつて自治的に行はれてゐた。併し村は單に行政上の單位たるのみならず、同時に又納税上の單位をなし、租税は村に對して課せられ、村役人は之を更に各戸の石高に應じて之を割當し、未進不納の者ある場合は一村全體の責任として一切の年貢を皆濟せざるべからざるものであつた。かくの如き農村一般の性質は妙心寺領の村々に於ても共通にして特に

異なる所はない。村役人中、庄屋は村里の長にして農政は勿論一般行政司法事務を掌つたのであるが、その任期には一代限りの場合と、二代三代と世襲したる場合とある。庄屋の交代する場合に、その「跡役」を百姓總會に於て決定し、その認可を妙心寺に願ひ出たる場合もある。例へば寛政八年八月に、物集女村から年寄・百姓總代連署の下に、「御下庄屋武右衛門是迄役儀相勤罷在候處此度病死に付跡役之儀百姓出會相談仕候處百姓嘉左衛門相願申上度候間庄屋役嘉左衛門へ被仰付候者百姓一統難有存奉候」と願ひ出でしが如きはその一例である。又、庄屋が一村の年貢皆済につき全責任を負うたことは、庄屋役に就くの際、本所に提出せる次の如き「請合證文」を觀ても分るであらう。

差上申請證文之事

一 物集女村之内高七拾石也 御兩寺領永代三拾八石之定納に御請申庄屋相勤申候先々之庄屋請合證申候處經天下一統之風水旱損虫くひ御座候共一切免之御歸申上間敷候勿論物成之上少茂相違無之末進在間敷候然御田地普請料并に水料庄屋給分百姓中へ出し 御本所様江者掛ヶ不申上候萬一御無沙汰於有之者如何様共急度御糺明可被遵候先庄屋武右衛門相果候に付此度在高七拾石之庄屋拙者に依仰付爲後證 御兩寺様江請合狀壹通宛差上申上候仍商如件

物集女村

寛政八年丙辰八月

庄屋 嘉右衛門

年寄 新二郎

百姓總代 彌兵衛

右同斷 五右衛門

右によつて、妙心寺本所並びに村方の年貢に關する機關をば明にしたと思ふが、今一つ忘るべからざるものがある。夫は「地方役人」と稱せらるゝものである。之は妙心寺から任命せられ、一定の役料をとりて妙心寺領全般に亘る年貢取り立ての責に任ずる徵稅機關である。言ふ迄もなく彼は本所に直屬する機關であつて、利害の相反する本所と百姓との間に介在して、年貢に就いて種々の折衝をなすものであり、苦しい役であつたことは想像に難くない、定員は一名である。

但しこの「地方役人」の管掌したのは妙心寺領の内、山城國にある西京、西院、谷口、池上、物集女村に限り攝津國の村には及んでゐない。攝津國の原村と富田庄の年貢を掌つたものは、妙心寺の末寺たる普門寺であつて、毎年妙心寺より「年貢勘定行者」又は「執事」が下向して之を查收した。年貢米を直接妙心寺に輸送せずして、賣却してその代金を納めしむるを例とした。

(註)「地方役人」は又一に「田地役人」ともよばれてゐたが、本山の中央機關たる「田地方役人」と區別せられねばならぬ。その名稱は既に寶永七年二月の記録にみゆるが、其役に住ぜられし人名の明なるは享保以後である、而してその役料は、享保十一年四月十六日の定に據れば、米三石、その他、水見難料、新池見難料等を給せられてゐる。又、年貢取立成績の良好なりし年には、特に「心付」を貰つてゐる。

吾人は年貢收納に關する諸機關を説明したるを以て、次にこれらの諸機關の運用を一言したい。徳川時代の租稅賦課方法は太別して定免と檢見の二方法となしうる。妙心寺領は所謂「定納」

即ち定免法をとつてゐた。その詳細なることは後に述ぶるが、各村に賦課せられた年貢に就ては、各村の庄屋及び年寄が皆済の責任を負ふ。更に各村々の庄屋と折衝して年貢の上納方を督促するは「地方役人」である。本所が年貢に關して一々直接村に交渉するの必要はなかつた。年貢は米納を原則とするが、金納をも許してゐる。その收納は明和五年八月には「以後九月より十一月迄の三八の日と定む」と決定してゐる。若し村の百姓にして年貢未進又は不埒なることある場合に、本所が田地を取上げしこともあり、又、一村全體にかゝる不都合ある場合に、公儀に訴へ出てその村が年貢を皆済する様、お上の「御威光」を以て庄屋・年寄に仰付けられたと嘆願してゐることもある。

(註) (一)、天明七年十二月廿日、年貢未納に付、百姓彌平治田地を取上げらる。(二)、天明七年六月十七日、西京の百姓年貢不埒に付、退藏衡梅の地面取上の儀を公儀に願ひ出づ(『法山記録』に據る)

三 寺領民の公課負擔

徳川時代の租税を大別すれば、田租、小物成、課役の三となしうる。然らば妙心寺領の税制は如何。先づ妙心寺領の田租を觀るに、其租率は時代によりて多少の變動はあるが、徳川時代を通じて五公五民乃至七公三民の間にある。^(註)當時の一般田租の平均率を五公五民とすれば、田租の負擔は一般より重過ぎたといはねばならぬ。

(註) (一)、正徳二年七月十二日、物集女村の庄屋から本所に差出したる「一札」に據れば、村高七〇石にて定納(免)三八石にて此

租率五四% (二) 享保十二年六月の「常住領田畑」字畝歩石高 名寄帳に據れば、常住領五三、八七六五石、定納(免)三四、四八一六石にて此租率六四% (三) 文化十四年四月の「御領分御田地字高物成改帳」西院村に據れば、西院村高一一、五八三石、定納(免)七、八三八一五石にて此租率六五% (四) 同年同日の「妙心寺領」物集女村、百姓指田之寫、田地方に據れば、物集女村高三五五石、定納(免)一九石此租率五四%、其他寛永十一年の負擔を調査するに平均租率は六五%となる。(五) 擬津國原村、富田庄からの年貢増濟目録には明に「免七ツ」と記されてゐる。

田租の租率は上の如くなるが、妙心寺領にては古くより定免法をとり檢見法をとつてゐない。定免法は年の豊凶に拘らず、一定率の年貢を取立つるものなるが故に、凶作若くは水旱損の甚だしき年には、百姓は年貢上納の爲に非常に苦しむのである。妙心寺領民も亦屢々かゝる場合に遭遇した。かゝる際に百姓は實際立毛の様子を檢して、其年の年貢の一部若くは全部を減免せられんことを「出地方」に願ひ出た。之を「檢見願」又は「内見願」といふ。併し「田地方」は年の豊凶水旱損に因りて檢見をなすことは、定納制の意義を失ふものであり、且つ將來に惡例を貽すものであるとして、多くの場合にその願を却下したが、實情止むをえざる場合に稀に破免を行つたことがある。例へば享保十年に「諸院より内見の上、定納一石の所の收穫皆無の場合は、その年貢を八斗充」と定め、同十一年には「皆無は斗り口一石に五升、毛付の分は有米皆納の上、斗り口一石に付五升宛相加入」と規定されてある。同じく收穫皆無の場合の破免にも、ある年は一石に八斗、ある年は一石に五升といふ様に一定してゐない。更に降つて明和七年八月廿七日の破免の規定を觀るに次の如くである。

定納一石に付き

皆	無	二斗	有毛四ツ	六斗
有毛五步	三斗	同五ツ	七斗	
同 一ツ	三斗	同六ツ	八斗	
同 一ツ半	三斗五升	同七ツ	九斗	
同 二ツ	四斗	同八ツ以上	定納	
同 三ツ	五斗			

右に據れば、定納一石につき收穫皆無の場合も猶二斗を納むるを要し、立毛の五分、一割、一割五分、二割の場合に、二斗、三斗、三斗五升、四斗といふ米を納めねばならぬのである。以上は正租たる田租に就て述べたのであるが、徳川時代には一般に正租に附加して、口米・口永・缺米の制があつた。妙心寺領に於て缺米をとりしことは記録には全くみえぬ。元來、缺米は正租を御藏に輸送するまでに生ずる缺減を補充する名義の下にとらるゝものである。妙心寺領は山城國と攝津國とにあつたが、山城國にある村々は本所たる妙心寺の附近であり、又攝津の二個村の年貢は妙心寺に輸送せず、同所に於て賣却した代金を納めしむることゝなつて居りしが故に、缺米徵收の理由はなかつたのであらう。口米は妙心寺領に於ても之を徵收してゐる。但し夫は定納高に含まるゝ場合多く其率は判然せざれども、「文化改 妙心寺領西京臺水帳」に據りて計算すれば、一石につき二升の割合である。

正租并びにそれに附加する百姓の負擔は大略右の如しとして、次に小物成に就て之を觀るに、

妙心寺領中、攝津の原村・富田庄からの年貢皆濟目錄には明白に小物成高無しと記されてゐる。山城國の村々からも小物成を課徴したる事例は全く見當らず、且つ「山城國葛野郡乙訓郡 攝津國嶋上郡之内郷村高帳」に據れば、妙心寺領を四百九拾四石五斗六合と記し、「但小物成高并新田高無御座候」とある。されば妙心寺領にて小物成をとらざりしことは明なる如く、この點は當時の一般税制と著しき相違である。

次に當時の公課の一である課役をみやう。寺領民の課役としては二種のことを考へうる。一は幕府の課役、一は本所たる寺の課役である。先づ前者より考察せんに、徳川時代の幕府の課役には種々ある。例へば、堤川の修築、朝鮮來聘使費、日光街道修覆費等の臨時費に充つる爲に、國を定めて石高に賦課する國役金の外、傳馬宿入用、六尺給米、藏前入用金等所謂三役或は高掛物と稱せらるゝものもあつた。さてこれらの課役が御朱印地たる寺領にも及ぶものなりや否やは、當時可なり論争せられたのである。その理由は御朱印狀にある「寺中（或は境内）門前山林竹木諸役、免除」の文言、即ち學者の所謂「免除文言」の効力が、門前境内のみに止まるものなりや、將又、門前境内以外の寺領一般にも及ぶものなりやに就て、人により其解釋を異にしたるに由る。茲に於てか從來朱印狀を有する社寺の領地に於ては、朱印狀の「諸役免除」の効力が一般寺社領にも及ぶべきものなりと稱して課役を負担せず、幕府の役人は「諸役免除」の効力は境内のみに限るものと解して、廣く課役を寺社領にも及ぼさんとしたのである。其論争を老中に具申した結果、寛永三年に幕府は自今社寺領に於ても自餘の私領と同じく、人足諸色を出すべきものであると定め

た。徳川初期に於て寺社領に國役を課することは實際に行はれなかつたが、享保頃より次第に之を課するに至りしは、從來「諸役免除」の効力範圍が明ならざりし爲であらう。寺社領と課役との關係は右の如くなるが、妙心寺領にてもこの點に關して確定的の解釋なかりしものゝ如く、享保年代には高掛銀について屢々公儀へ伺を出してゐる。併し實際上課役を負擔したるものゝ如く、寶永七年八月には「國巡見入用人足賃の高掛」を、享保七年十一月には「大川筋御普請の高掛」を、同十四年七月には「國役及び高掛」を、延享三年九月には「國巡見人馬割合銀」を出してゐる。但しその額は何れも不明である。總てこれらの課役は妙心寺に對して課せらるゝものにて、直接村に課せられしものに非る如くである。妙心寺にては「田地方」が専ら之を掌り、又場合により特に高掛りの「掛執事」を選任したこともある。

次に地頭としての妙心寺の課役を一言したい。之は領内の堤防の修理、小普請、樋普請等に要する人足の徵發、經費の負擔を主なるものとす。但し人足には通例勞賃を支拂ひ無償に使役したる場合は少い。又これらに要する經費は常住領のみに關する場合は「田畠普請料」として年々支出せらるゝ本山の資金中から支拂はるゝのであるが、その額の比較的多き場合又は工事が諸院の領分に跨れる場合には、其堤防、川、樋等の隣接地域の領主たる各本所に割當したのである。試みに寛政六年正月の「坂の下井手普請入目」の割付を示さう。

一銀六十五匁 坂の下井手普請入目

割付拾壹石壹斗壹升三合六勺八才

但壹石に付五匁八分五厘宛

二匁九分二厘五毛	五	斗	當	住	領
五匁三分七厘	九斗一升八合		如是院	領	
五匁六分三毛	九斗五升六合		衡梅院	領	
五匁三分七厘	九斗一升八合		乾德院	領	
四匁七分七厘三毛六弗	八斗一升六合		壇林院	領	
三匁八分二毛五弗	六斗五升		天授院	領	
二匁八分九厘四毛	四斗八升七合二勺八才		靈雲院	領	
四匁二分七厘五毛	七斗三升		春光院	領	
十匁五厘九厘七毛	三石一斗七升九合五勺		退藏院	領	
十匁九分一厘六毛	一石八斗六升五合四勺八才		養德院	領	
五分五厘	九升四合		南涌院	領	

即ち普請の總經費銀六十五匁を隣接地の石高拾壹石壹斗壹升三合六勺八才に割當して、一石當りの經費五匁八分五厘を算出し、その割合を以て各本所に賦課したのである。妙心寺が一山の普請修築の爲に、又は法用費調達の爲に臨時の課役を課したるが如きは全くその例をみざる所である。

最後に妙心寺領の地子を述べたい。地子は宅地敷地に課せられしものにて、今日の宅地租にも準すべきものである。妙心寺領にて地子を課徴したることは、當時の藩領天領と同様である。即

ち門前町及び門前町以外の敷地、その外境内に於ても之を課徴したる事例をみるのである。妙心寺の門前町には南門前、北門前、西門前の所謂三門前があつて、その廣さは約七町歩にて洛中の多くの門前町の中最も廣きもの、一であつた。「文化改 三門前 敷地地子 間敷米高 指出本帳」に據れば、當時西門前町の家數二十一軒、地子合計四石四斗八升四合三夕、南門前の家數は三十七軒、地子合計拾四石七斗二升六合、北門前の家數は五十二軒、地子合計九石七斗六升七合六夕である。以上三者を總計すれば家數百十軒、地子二十八石九斗七升七合九夕となる。その租率は土地の品質と面積とに因りて定められ、各々その本所たる諸院へ上納せられたのである。門前町以外の地子の例として、例へば、「文化改 常住并諸院領地子書拔」に據れば、塔頭衡梅院が、「上屋敷池上在所」にある水月院の宅地三畝その石高四斗より定納四斗の地子を收め、又同所にある福壽寺の宅地拾六歩、その石高六升九合より定納六升九合の地子を收め、又、池上の百姓善助の宅地四畝八歩、その石高五斗五升五合より地子四斗を收めてゐるのである。又、境内に於て地子をとれる例としては、同じく右の資料中、乾徳院が妙心寺境内にある慈雲院の敷地石高九斗九升八合四勺より地子五斗を收め、衡梅院が大法院(今の龍泉菴)の敷地石高壹斗五升六合より地子壹升二合を收めしことが分る。之を以てするも御朱印狀寺領の境内に對する「諸役免除」の文言は、單に對幕府上の關係を示すに止り、境内の對寺院上の關係は全然別個の問題であつたといはねばならぬ。

さて吾人は妙心寺領民の公課負擔について色々述べ來つたが、この負擔は他の藩領天領の住民の負擔に比してその輕重は如何であつたか。既に述べたる如く妙心寺領にありては田租は攝津

の國では七公三民、山城の國でも五公五民より遙に重い場合が多い。之は明に當時一般の田租に比して過重であつたと思はれる。併し妙心寺領に小物成の負擔のなかつたことは注意せられねばならぬ。これらを相殺して負擔の輕重を斷することは難しとする所なるも、兎に角、百姓が生産の結果を殆ど剩す所なく奪はれて、農奴の如き慘な生活を營んでゐたことは事實に近いであらう。

百姓の生活は右の如く餘裕なかりしものなれば、一度水旱損風害等に遭遇すれば、忽ち生存を脅さるゝに至るは想像に難くない。かゝる場合には之が救濟方を本所に願ひ出づるを常とした。妙心寺の「田地方」は大抵之を拒絕したのであるが、窮狀止むをえざるものある場合には「救米」を出した。試みにその事例を示せば次の如し。

天明 六年十一月六日	西京並西院村百姓へ救米
寛政 三年十一月十七日	大風不作に付領分へ救米
寛政 八年九月十七日	西京池上前野旱損に付救米
文化 元年十二月十九日	池上臺虫入並旱損に付救米
文化 四年十一月六日	凶作に付池上前野臺へ救米
文化 五年十二月一日	凶作に付領分へ救米
文化 六年十月廿八日	凶作に付領分へ救米
文化 十四年十一月六日	旱損に付西京前野臺池上三ヶ村へ救米
文政 四年十月廿六日	西京前野臺池上へ救米

凶年に或は減租をなし或は救米を施與するなどは、天領藩領にも行はれたることにて、之は夫が妙心寺領にても行はれしことを示すに過ぎぬ。天領にありてはこの外救荒政策として、種貸・肥料貸・延賣貸借等が行はれたといふが、妙心寺領にかゝる事例ありしや否や記録の徴すべきものがない。猶この外旱魃の際に百姓より妙心寺へ雨乞の祈禱を願ひ出たることもあれども、其願を容れて祈禱をなしたる例は極めて少いのである。

四 土地の管理

土地の管理として茲に述べんとするは、田畠普請と土地賣買登記とについてである。前者は耕地としての田畠の管理であり、後者は權利客體としての土地の管理である。徳川時代は學者の所謂米遣ひの經濟時代にて、米が國民の財政經濟の基礎をなしたのである。かゝる時代に米を生産する土地の尊重保護せられたることは言を俟たず、田地の荒廢は直接年貢收納の多寡にも影響するを以て、幕府の如きも極力之を防止する策を講じた。之は妙心寺領に於ても亦同様にて、田畠の普請に常に留意した。村々の田地は村々の責任を以て之を普請せしめ、數村に關係あるもの或は大規模の修理は妙心寺の「田地」が直接之を掌つた。妙心寺にては田畠普請は一の特別會計として設けられ、年々若干宛の田畠普請料が豫算に計上せられた。「田地」の直接掌つた田地の普請は、田地の破壞缺損の修補をはじめ、堤防の修築、池の開鑿、樋の布設、陰樹の採伐等消極的に地力を保持するに止らず、積極的に之を増進するの施設も行はれたのである。而して之に要す

る經費は普請が常住領のみに關する場合、年々本山より支出せらるゝ田畠普請料によりしも、普請地が諸院の田畠に跨る場合は、之に關聯する田畠の高に應じて割當せることは既に先にも一言せる如くである。

次に土地賣買登記を述べやう。元來、徳川時代には土地兼併の弊を恐れて、土地の永代賣買を法制上禁止してゐたのであるが、實際は質入或は貸借の名義にて土地の賣買が行はれたのである。妙心寺領にても「田地譲り替」が屢々行はれ、殊に弘化年度以後に至りて一層頻繁となつた。土地を實際上何人が使用してゐるかといふことを明にするは、知行權を行使する上にも必要なことなりとし、弘化三年九月十三日、「田地方總聚會」に於て、從來「田地譲り替は古券に添書相認め庄屋の奥書印形」のみで事足れるも、今後は妙心寺本所に「田地譲り替帳」を備へ付け、之に一一賣買契約を登録して「田地地方」の割印を加ふるに非れば、その讓狀は「返古(反古)たるべし」と規定するに至つた。左に登録書式の一例を掲げんに、

譲り渡申田地之事

年月の輪

壹反三畝拾歩田

高靈石六斗 四方

定納靈石五升

御本所 瑞松院様

東は法金剛院村治兵衛田地限り
西は土手限り
南は土手限り
北は本人八郎兵衛田地限り

説苑 妙心寺の寺領と領民の負擔

第二十三卷 (第五號 一二一)

八二三

説苑 妙心寺の寺領と領民の負擔

第二十三卷 (第五號 一二二) 八二四

右之田地我等所持來り候處此度勝手ニ付其本殿へ譲り渡し申候處實正明白也、則爲幕代銀三百八拾目體に受取申候、然る上
者有田地に付親類は不申及、他所へ遠隔妨申者毛頭無御座候、萬一妨申出候者我等印形之もの罷出、急度埒明其本殿江少茂御
難相かけ申聞敷候、爲後日田地譲り狀仍面如件

弘化四年未四月 南門 前

譲り主 入良兵衛印

同所親類

加印 宇兵衛印

法金剛院村

口入 岩右衛門印

山之内村

惣助殿

右之通に畝高定納相違無御座候以上

妙心寺領

庄屋 七郎兵衛印

古の如く田地の位置・境界・石高・定納・所屬之本所を明にし且つ賣買契約當事者・保證人・口入人
等の印形を加へ、更に庄屋の證明を附して妙心寺に提出せしめてその割印を附して始めて登錄手
續を完了するものとなした。その手續は後日の紛争を避くる爲に可なり入念のものであつたこと
は分るであらう。

以上吾人は妙心寺領の年貢收納組織並びに領民の公課一般に就いて概要を述べた。年貢收納機關としては妙心寺に「田地方」にて年貢事務を専ら掌つたものがあるが、夫は塔頭諸院から僧侶が交代に之に當りしものにて俗人に非ること、又、徴税機關として「地方役人」を置きたること等は注意すべく、公課としては田租課役は存したるも小物成のなかりしこと、並びに定免制をとりて而も七公三民の重税の行はれしことは更に注意すべき事であらう。地頭が寺院なるの故を以て、又は慈悲忍辱を説く僧侶の支配下にありしを以て、寺領民が特段の恩惠慈愛に浴せしものならんなど考ふるは全く事實に反することである。次に境内から地子をとれる一二例を示せるは、寺社領の私法的性質を論斷する上に見通すべからざることである。一部の學者は御朱印寺社領の境内を以て官有地なりと論せるも、公法上の性質と私法上の性質は別個の問題なりとする中田博士の説は正しきものとなさざるをえぬ。さて翻つて臨濟宗大本山としての妙心寺の收入を窺ふに常住領僅に七八拾石に過ぎぬ。夫を以て一派本山の地位を保ち大伽藍を經營して行くことは決して容易の業ではない。これ妙心寺が極めて金錢出納を嚴重にし、理財の方法に苦心し特色ある經濟をなすに至つた一原因をなすものであらう。門前町の生活については他に之を譲ることとする。兎に角今日の租税制度は全國的に統一せられてゐるが、徳川時代には天領藩領寺社領等があつて、夫等が各自治權を有したるため、領民の生活はまち／＼である。故に各方面の研究を盡し、相互に比較考究する所がなくてはならぬ。此小論がそれ等の資料として役立つならば幸甚である。

(附言) 妙心寺の經濟史的研究につき多大の便を與へられし同寺の高林玄寶・入道紹溫・川上孤山・澁谷鼎山・河野常忠・石河乗因・淺田千雄・高橋乘因諸師並に龍安寺住職大崎龍淵師に厚く感謝の意を表する次第である。